

の申告を聞いていた佐官と尉官と二人いたが、二人は比島より最後の連絡で台湾へ辿り着いていた将校のようだった。

ということで比島赴任不可能で、台湾第十方面軍独混百三旅団通信隊へ配属を命ぜられた。

それから後、台湾防衛ですが、総軍参謀部に各師団連隊の指揮官が招集されて、兵技演習の机上説明でした。

その時「極秘電報が入った」と私のところへ通信の古参軍曹がいつてきた。解読を命ずると、今度はまっ青な顔をして電文を持ってきた。私も慌ててそれを読み、今一度解読したが間違いなした。極秘電報は暗号専門将校が解読また発信することとなっている。直ちに先任参謀に「極秘電報です」と解読電文を差し出したら、「馬鹿もの」と叱って、電文を読んで顔色を変えた。各師団長や指揮官に「一寸待て」で司令官に電文を渡し、発表した。電文は「大本営発、戦闘停止、爾後の命待て」でした。一度に気が抜けたようで、頭の中がカラッポになってボーとしましたよ。まあ以上が私の軍人時代でした。

常徳殲滅作戦

滋賀県 西村 政治

作戦開始の集結地へ

船団輸送

防衛庁戦史叢書によれば、支那派遣軍(第十一軍)は昭和十八年十一月二日に常徳戦開始となっているが、第百九連隊は作戦開始の日よりも一か月早く十月三日原駐地である湖口を出発した。輸送船に乗船し揚子江を遡行した。一帯どこへ行くのか誰にも知らされていなかった。敵飛行機の目を避けて夜間の行動である。

漢口北岸に上陸し行軍また行軍

大軍団は西へ！西へ！次の日も次の日も行軍は二〇日間以上も続いた。一体どこまで行くのであるうか、準備行軍で当分敵と直接戦闘を交えるようなこともなかったが、治安は悪く住民の大部分は逃亡し、ゲリラがどこから出てくるかわからない。特にこの地域は、共産軍が

勢力を盛り返し、盛んに住民工作をやっているので、夜間の宿宮の間は警戒を厳にする必要があった。

落後するな！ 豆を出すな！ これは部隊の合い言葉のようなものであった。一度落後したら、部隊に追及することは容易なことではない。敵のゲリラにでも捕まったら兵器装具を掠奪されたうえ惨殺されてしまう。行けども行けども、果てしない支那大陸であった。

池の蓮（はず）の葉に目あり

苦力（クーリー）徴発隊が部落に入ると、住民はくもの子をちらすように四散し、男は一人も見当たらぬ。ひよっと池をのぞくと蓮の葉の真ん中にらんと輝く目があった。これはあやしいと思って竹で葉をたたいたら全裸の屈強の男が現われた。逃げ遅れた男は、猿飛佐助ならぬ水遁の術を使つたらしい。

石首北方地区に結集し進攻準備

石首は揚子江岸にある大きな街で、中支軍の守備する最先端の要衝で、江を渡れば、蒋介石直系系軍の占領地域である。

第一百十六師団は石首北方地区に隠密に集結し、十月二

十八日夜を期し一斉に揚子江を渡河し、西方に向かって進攻する企画が判明した。

思えば漢口北岸に上陸以来、えんえん三百余キに及ぶ苦しい長途の大行軍であったが、戦争はいよいよこれからが本番である。

各隊は勇躍し、兵器を手入れし、糧食を整え、暇をみては戦闘法の訓練を行った。戦地に入ってから注意として厳命されたことは、

敵意なき住民は殺すべからず

民家は焼くべからず

女を犯すべからず

であった。

鞭声粛々揚子江を渡る

この夜は全くの闇夜であった。師団工兵隊の準備した門橋（大発艇をもちいにしたものは次々と岸を離れ、対岸に兵員を揚陸するやすぐ引き返し、部隊の渡河は、整々粛々として行われた。馬も緊張していななき一つしない。幸い我が行動の企図の秘匿は成功し、対岸における敵の配備はなく、搜索拠点を推進し、敵状、地形の捜

索に任じ三十日の夜を迎えた。

これまでに知りえた敵状は、これより前面には数キロにわたり敵が陣地を占領し、その縦深は沙口付近まで達している。部落及び堤防を巧みに利用し、陣地前には急造の竹矢来の障害物を構築しているとのことであった。

前進拠点の攻略

百弓嘴付近の戦闘

第二中隊長戦死（鈴木文夫中尉）

MG中隊長負傷（辻 義雄中尉）

第一大隊は連隊の左第一戦となり主として百弓嘴付近の敵を攻撃すべき命を受けていた。攻撃開始は夜二〇時と決められた。大隊作業班は攻撃開始までに今夜のクリーク渡河に使用する民舟探しに大わらわで、何とか数隻を集めてきた。民舟により一斉にクリークの渡河を始めるや対岸の敵は盛んに射撃を浴びせてきた。

敵は迫撃砲を巧みに使用し、突撃距離に迫る第二中隊を悩ました。轟音、耳を聳するばかりであった。鈴木第二中隊長は機関銃、擲弾筒などを第一線に推進し、これらの一斉射撃により敵のひるむ瞬間を利用し突撃を号令

した。時に二二時五〇分であった。その瞬間、鈴木中隊長は腹部に敵弾を受け壮烈な戦死を遂げた。

かくして大隊は夜明けごろまでに百弓嘴西方地区に進出し、敵を追尾しつつ黄家台に向かって前進した。

黄家台付近の戦闘

第四中隊の奮戦

渡河攻撃の礎

もろくも敗退した敵は、沙口南北の線、大河を利用して陣地を構え決戦を企図しているようにみえた。黄家台の敵陣地の攻略は、今夜中になんとかなるとしても、その後方の敵状は全く不明のまま沙口河を夜の中に渡河して沙口西方地区に進出せよという、誠に無茶な注文である。夜までに渡河川として小船を集めたが、流れが急な沙口河、しかもその両岸は堅固に陣地を占領されていることが予想される状況において、この渡河攻撃は果たして可能であるかどうか、大隊長は苦悩せざるを得なかった。

午前三時、第四中隊柴山小隊を突撃隊とし、進撃を開始し、大隊主力はこれに続いた。我が前進を察知した敵

は堤防陣地から盛んに十字砲火を浴びせてきた。迫撃砲弾は前後左右に炸裂する。

早木中隊長は敵陣地の至近距離に達するや擲弾筒の一斉射撃を命じ、敵が制圧された瞬間を利用して柴田小隊に突撃を命じ、突入なるやこれを追尾して田中小隊を右方に突進するよう部署した。午前五時二〇分突撃成功、堤防上に喚声が上がった。続いて大隊主力が進出し、遁走する敵を掃討した。

この日あたかも十一月三日明治節の佳節にあたる。爆々として太陽の光が注ぎ始めていた。期せずして万歳の声が上がった。

沙口牧羊岡付近の戦闘

太陽を背に有利な戦闘

多数の捕虜獲得

師団及び連隊主力は沙口付近の敵陣地を突破し、引き続きその後方の陣地に対し攻撃を準備中であつた。

日本軍の偵察機が旋回し通信筒を落下して去つた。開いてみると「約千を下らざる敵は、青石牌渡河点に向かい退却中なり」との連絡であつた。薄明かりになつてい

たが、気温の逆転でもやが地上に薄くかかっていた。これが幸いして、我が行動は全く敵に知られずに近づくことができた。

小高い岡やまんじゅう型の墓地に、盛んにうごめく姿があつた。敵だ！第一線各部隊は直ちに攻撃を開始した。時しも真後ろから太陽が燦々とその光をさし始めた。

驚いた敵は滅法やたらと射撃を浴びせてきたが、その弾は頭上高く飛んでゆくばかりである。それに比して我が射撃は百発百中である。これは太陽の光を背にした天の利であらう。

八時を過ぎたころ、おびただしい敵が側面縦隊となつて、我に横を見せて田園地帯を退却しているのを発見した。その距離約二、三〇〇メートルである。機関銃及び歩兵砲は、この敵にたいし真横から銃砲撃を加えた。敵は算を乱し、くもの子を散らすごとく牧羊岡の部落に遁入した。大隊は大隊作業班をもって敵の遁入した部落の掃蕩を行いつつ午後二時ごろ終了した。我に一兵の損害なし。

大門土地の攻撃とその南方地区の掃蕩

― 四日夕より五日夜に至る ―

退却した当面の敵は南下して大門土地付近の既設陣地に拠った。双眼鏡で見ると数個のベトン製のトーチカの銃眼から、時々火を吹いている。第一大隊は連隊の第一線となり、この敵に対し攻撃を開始した。第三中隊は十九時ごろ第一線を突破、続いてその後方にあるトーチカにたいし強襲を加えたので、敵は大した抵抗もなく夜闇に乗じて劉家祠方面に退却した。

大隊は引き続き退却した敵を追い、夜行軍を行ったのであるが、歩けども歩けども目標地点に到達しない。夜が明けてみると驚いた。どこに錯覚があったのか、大部隊が同じところをぐるぐる回っていたではないか。

思えば戦闘開始以来、四日連日連夜の戦闘と行軍にもかかわらず体が持ちこたえてくれたものだ。第一、精神力があったからであろう。それにつけても、ここにおける大休止間の熟睡は価千金であった。

敵を急追、澧県に迫る

(自十一月五日、至十一月二十日)

第一大隊(第四中隊を欠く)は師団の直轄となり、速やかに三同日を経て桃水を渡り敵の退路を遮断すべき命

を受けた。よって青石牌で河を渡り、折しも雨中であったが急行軍した。連日の戦闘の疲労で落後者数名を出したが、とにかく敵と足の競争である。敵の大部隊は退却中である。一刻も早くその背後に進出することが我が任務であるので、泥濘の道を歩きに歩いた。桃水河の渡河である民舟に頼るほかに、民舟を発見したのは一隻しかなかった。大隊主力が渡河終了するのに約半日以上を費やしてしまった。

十一月十五日澧県攻撃。澧県はこの地区の重要都市であって街の周辺には堤防を利用し、幾重にも竹矢来等の障害物を設けていた。連隊は払暁攻撃を準備した。しかるに敵は夜の中に完全に撤退し、一兵もとどめず。師団命令により攻撃を中止し合口に向かうことになった。

合口渡河

合口は河のあわせ目にあつて常德方面に通ずる交通の要衝にあたる。敵は対岸一帯を占領して我が前進を阻止した。同師団百三十三連隊は十六日合口兩岸より薄暮攻撃を開始し、澧河を強行渡河し、敵陣を突破した。続いて百九連隊主力が渡河し追撃戦に移った。が付近一帯は

渡河する部隊で一時混雑を極めた（渡河は師団工兵隊の準備をした渡舟により行われた）。

再び澧県攻撃と連隊主力への追及

澧県は戦術上の重要拠点であって、もしこの地点が敵の手に渡ることになれば我が兵站線が断ち切られ、第一線部隊が孤立してしまふ。ところが十一月十五日我が部隊が攻撃したときは、一兵もとどめず撤退したはずであったのに、再びこの地を占拠しているとの情報があった。よって我が大隊は師団命令により独力で澧県を攻撃すべく第三中隊の一小隊をもって澧河の左岸を、大隊主力をもって右岸を澧県に向かい前進した。

大隊は黎明を期し第四中隊をもって一斉に澧河を渡河し突入したが、何らの抵抗を受けることなく同地を占領した。

早木中尉の指揮する第四中隊は、常德城陥落まで同地にあつて長大な兵站線の守備、援護、時によつては侵入しきたる敵の攪乱部隊を迎え撃つて寧目がなかつた。特に師団の反転作戦時においてはよく同地付近を守備し、師団各部隊の反転を支援し、その作戦を容易ならしめた。

常德外郭陣地の攻撃

黄土山の攻撃

沙港付近の戦闘

七里橋付近の戦闘

（自十一月二十日、至十一月二十四日）

黄土山の攻撃

十一月二十日、暗夜泥濘の中の行軍は難渋を極め、二キを行軍するのに約一時間を要し、中には滑つて転倒するものもあつた。

「後尾異常ないか」声を掛け合いつつ各人の白布標識を唯一の目印として隊列が切れないように注意しつつ進んだ。臨澧到着、ここで中川小隊が別の行動をとつていたのだが、偶然、大隊に復帰するとともに連隊の主力は盤龍橋にあるを知つた。

龍家巷を出発し陝市に向かう。遙か南方の陝市方面に火災を望見する。進路を照らしたために行軍ははかどる。連隊主力と会う。進攻開始以来約三〇日にすぎないのに、布上連隊長の頭髮はとみに白くなつておられたのに驚いた。

黄土山の攻撃　黄土山は標高五、六〇呎の小山で常徳城の西北方十数^キの所に位置する。常徳城を守る敵としては重要な前進拠点であり、頑強な抵抗があるものと予想された。大隊は一五時連隊命令を受けるや直ちに展開し、第三中隊の今井小隊、第四中隊の中川小隊を右第一線とし、第二中隊（柏木）を左第一線、機関銃中隊及び歩兵砲小隊は概ね中央に位置した。一五時四〇分攻撃開始、我が砲弾の爆発は物凄く黄土山上至る所に黄色い土煙を立てた。敵は当初射撃により頑強な抵抗を見せていたが、戦闘意志を失い東北方に潰走した。

この日第一大隊は連隊の前衛となり、二十三日早朝、沙港に向かい前進した。この朝霧深く目視の範囲約三〇呎程度である。柏木尖兵中隊は霧の中より猛烈なる射撃を受く。同中隊は霧を利用し、竹矢来を突破し突入する。対岸の中川小隊は真横から射撃を加えたため敵は屍体三を残して潰走した。敵を急追し揚家橋に達するころ再び抵抗があり、我これを突破するや次の抵抗線が待ち構え、堤防を巧みに利用する。逐次抵抗の時間稼ぎである。一〇時ころ霧は次第に晴れてきた。これからの攻撃は正面

からの無理押しではいたずらに我が損害を増すばかりである。機関銃、歩兵砲を第一線に進め敵の火力を制圧しつつ前進しなければならない。山砲による直接照準射撃は特に効果が大きかった。

一方、対岸の中川小隊方面ではクリークの交差した堤防で頑強な敵の抵抗を受け、ニッチもサッチもいかぬ状態であった。そこで舟艇班を救援に向かわせ、別に第三中隊の松里分隊は民舟によりクリークを渡河し、背後より急襲したので、敵は算を乱して潰走し、捕虜八を得た。

沙港付近の戦闘―布上連隊長戦死―

学校部落を占領した大隊は、息つく暇もなく沙港付近の敵攻撃を準備した。

沙港付近の敵はクリークの堤防を巧みに利用して陣地を構築し、前面に竹矢来、鹿砦等の障害物を設け、後方には迫撃砲、山砲等を配慮している模様であった。大隊は山砲及び歩兵砲等の支援射撃の下に三軒屋に進出、一六時三〇分ころ連隊長は各隊長を堤防下の連隊本部に集め、当面の敵攻撃に関し左記命令を下達した。

一六時五七分より三分間歩兵砲、山砲、その他全

砲の集中射撃を行う。

第一線部隊は一七時一斉に前面敵陣地に突撃すべし。

堤防陣地を奪取せば、第三大隊は第一線部隊を超越し、沙港北方に進出すべし。

三分間の集中射撃が始まった。我が全火砲は火を噴き、敵陣地は爆煙に包まれ、天地ために暗しの感である。三分間が過ぎた、今ぞ！第一線各隊は一斉に突撃を開始した。今井少尉の指揮する小隊はまず堤防の一角を確保したが、その直後敵の逆襲があり、発煙筒の投射により敵の目をくらまし、再突撃を図ったが、風向きにわかに変わり煙が我が方にかぶさってくるなどがあった、敵陣地直前の障害物にはばまれ、死傷続出し、敵と至近距離に対峙したまま夕暮れを迎えようとしていた。第十二中隊方面もおおむね同様の状況であった。

布上連隊長は堤防下の連隊本部において双眼鏡を手にし、鋭意戦闘指揮中であつた。この時、連隊本部のあたり、一大音響と煙に包まれた。

敵迫撃砲の集中射撃を受けたのである。布上連隊長は

壮烈な戦死を遂げられた。同時に側近にあつた情報將校の田原中尉も戦死した。一瞬の出来事であつた。

布上連隊長の戦死により第一大隊長鈴木少佐が代わつて連隊の指揮をとることになった。

日没後新たに受けた師団命令

「百九連隊は、現在の位置より転進し南匹岡より唐家舗方向に進出し、常德に対する攻撃を準備すべし」

これがため各隊は隠密に第一線を離脱、集結のうえ転進を準備した。連隊本部は二三時ころ、前衛たる第三大隊の後に続き、肅々と前進を始めた。転進すべき途中には、氾濫及び湿地帯が横たわり、部落は水浸しとなり、屋根のみが見えているのであつた。

こうしたところを大部隊が民舟またははしごなどを利用し対岸まで達することは容易なことではない。もし敵にして機を見ること敏であり、反撃に転じてきたならば、我はどうなつていたのであろうか、思えば肌粟を生じる思いがする。

七里橋付近の戦闘―島村第三大隊長戦死―

十一月二十四日、夜明けと共に南匹岡北地区に進出することができた。そこで今井小隊を唐家舗に通じる堤防を占領せしめて第三大隊の進出掩護に任せしめ、第二中隊をして七里橋方面の、また第十二中隊をして新堤に進出し当面の敵情、地形の搜索に任せしめた。

敵は常徳城を準備する右翼の外郭陣地として七里橋、東西の線に堅固な野戦陣地を構築していた。でこぼこの丘陵地帯で幾重にも堤防があり、これを利用してトーチカ式掩蓋火点を縦深に配慮し、陣地前には竹矢来や鉄条網等の障害物を設けていた。

師団の企図は、百九連隊を左第一線攻撃隊とし、速やかに当面の陣地を攻略し、直接常徳城に迫ることにあつた。常徳城はここから南方六、七キの距離にある。

八時攻撃開始、敵は掩蓋を施した火点から盛んに射撃を加え、また不意に側防火器を現出するなど我が前進を阻害した。迫撃砲弾は、間断なく爆煙を上げる。十五時ころ、敵は猛射と共に逆襲してきた。第三大隊はこの敵を撃退した。敵は二度目の逆襲を図ってきた。

第三中隊は突進し逆襲部隊の側面から射撃を加えたの

で敵は動揺した。このころ第三大隊長島村大尉は、戦闘指揮中に胸部に貫通銃創を受けて壮烈な戦死を遂げた。

第一二中隊は当面の敵を撃破し、敵の右翼方面へ迂回攻撃を図ったが、頑強なる敵の抵抗に逢い、対峙したまま夕刻に至った。

日の没するころ、漸次退却の兆候あり。よって我は現態勢をもって敵を急追するとともに、常徳城に迫るため遂次部隊を整理した。

七里橋部落に淡々たる火炎が上がっていた。多分敵が退却に当たって火を放ったものであるう。しかし我にとっては前進方向を示してくれたようなものでありがたかつた。

午後九時ごろ、遙か南方を望めば常徳城のあたり、銃砲声、豆を炒るごとく、赤青の曳光弾が飛び交う様は、両国の花火を見るの感があつた。多分我が師団主力である第百二十連隊と第百三十二連隊が常徳城攻撃を開始したものと恐れ、我が前進をせきたてた。

連隊は遂次兵力を集結し、常徳城北門に向かい突進を図った。

常徳城攻撃

北門外に達す

暗夜の突進は、多数の敵を置き去りにし巨大な壁にぶつかったと気がついた時、我が部隊は常徳城北門に達していた。

あれほど銃砲声が盛んであった常徳城が森閑として鬼気迫るの感じである。城内は一面焼け野原を呈している。時に盛んにうごめく姿あり、ひそひそ話は日本語ではなかった(敵陣地内)。

直ちに引き返し北門外を占領して敵と対する。時に十一月二十六日五時ころである。

南門外の混戦

第二中隊横山小隊は尖兵となり城外壕の堤防に沿い前進し、南門外の市街地に入らんとしたとき、思いがけないお客さんにぶつかった。敵の兵隊さんが鉄砲の先に「アヒル」を吊り下げてスタコラこちらに歩いてくるではないか。・・やっこさん、まさか日本軍がこんなに早く出てくるとは、夢にも思わなかったらしい。

ヒヨイと頭を上げてみると、すぐ鼻先に日本軍が道

いっぱいになって進んできてはいないか。「ヒャー」くると背を向けると、脱兎のごとく逃げ出した。

尖兵は近くに敵ありと察し、逃げる兎を追って南門外市街に入った。いるわ！いるわ！敵は朝餉の支度の真っ最中であつた。それっ！横田小隊は突入した。敵は逃げる・・かくれる・・我は追いかける。あたかも鬼ゴッコのような様子が展開した。窮した敵は街はずれのトーチカに逃げ込んで抵抗したが、やがて鎮圧された。大部分の敵は城内に、一部は沅江に沿って下流に遁走した。

常徳城総攻撃(一)

敵は袋の鼠のごとく城内に立てこもり、徹底抗戦を期している模様である。

連隊は二十八日夜、久安院部落で待機中、常徳方面に盛んな銃砲声を聞く。なお、この時までには知り得た一般敵状は、我が軍が常徳に釘づけになっている間に約三個軍団が各方面から迫りつつあって、蒋介石は常徳城守備軍に電報を送り、勇戦をたたえたと共に最後の一兵にならんと常徳城を持ちこたえよ、と督戦したという。ちなみに守備軍の主力は中央直系軍五十七師であることが判

明した。

城内の模様をみるに、北半分は我が砲爆撃及び火災のため瓦礫の山と化し、市街地は中山西、東路及びその北を走る東西幹線及び沅江に沿う地区である。

敵は市街地及び焼け残りの家屋を利用し、街路の要所、要所にはトーチカを構築し、頑強に抵抗する構えである。かくのごとき敵に対し我は左の攻撃方法をとった。すなわち

キリもみ戦法

家屋の壁に穴を開け、または一部を破壊して銃眼とし、猛射を加えた後、手榴弾を投じた瞬間を利用し、次の家屋を占領す。擲弾筒は水平射撃を活用する。

火攻め

家屋に火を放ち敵の拠るところならしめる。火炎の煙と共に発煙筒を利用し、神出鬼没の奇襲を行う。破壊班を編成すること。

機関銃、速射砲、歩兵砲は努めて第一線に進出し、攻撃隊に直接共同するとともに、トーチカに対しては直接照準射撃を銃眼に対して行う。

十一月三十日二三時攻撃開始

各隊は右記のごとき攻撃方法により、勇戦奮闘、夕刻までに約六〇〇坪前進、夜に至るもなお攻撃を続行する。

十二月一日

天明と共にさらに猛攻を加え、敵を西北部に圧縮するごとく努めた。しかし幹線道路の要点、要点に位置するベトン製のトーチカは、絶えず猛威をふるい我が前進を悩ました。左第一戦たる第一大隊はおおむね予定の線に進出した。

常徳城総攻撃(二)

十二月二日

常徳城内の敵は西より我が百二十連隊、北方より百三十三連隊、百九連隊、東方より土屋大隊の攻撃を受け、城内西南部に圧縮せられ、氣息まさに奄々たる状態である。

しかし、蒋介石より常徳死守の敕命もあって、我が再三の降伏勧告にもかかわらず、市街構築物を利用し頑強な抵抗を続けたが、その陥落は時間の問題とみられた。我が攻撃隊(総指揮黒瀬大佐)は、師団の企図に基づき

二日中にこれが陥落を期し、各指揮官を集め、最後の総攻撃命令を下達した。午前三時三十分であった。

百九連隊はひそかに夜陰を利用し、昼間の位置より数百以右に移動し戦闘態勢を整えた。

総攻撃

七時三〇分、砲兵隊の猛烈な一斉射撃が数分間続いた。第一線各隊は攻撃を開始した。第三大隊は臨時山砲中隊や連隊砲中隊の直接共同により家屋づたいに攻撃拠点を進め、おおむね西湖南端まで進出した。なお右方の家屋つづきに対し、火を放ったので火災を敵方に延焼していった。第一大隊は焼け残りの家屋を利用して攻撃拠点とし、主として黄金寺方面の敵を攻撃した。

直接協同の機関銃中隊は家屋の囲壁に銃眼を開けて第一線突撃隊に協力。

歩兵砲隊は主として黄金寺周辺の敵自動火器を求めて猛射を浴びせた。

午前十時ころ、おおむね西湖東北端に進出、敵との距離約五〇〜六〇坪である。死闘終日、夜を迎えた。

しかしこの日正午やや過ぎ、連隊長代理鈴木少佐は第

一大隊の第一線たる横田小隊のもとにあって戦闘指揮中、右下腹部に貫通銃創を受けた。その後、横田少尉も壮烈なる戦死を遂げるようになった。

常德城遂に陥落

十二月三日、常德城はついに陥落した。思えば布土連隊長を失った外郭陣地の攻撃から十日である。

この間、我が将兵は苦闘に次ぐ苦闘を続け、難局に処し、赫々たる戦果を収めることができた。

反転作戦

常德を長期に占領して爾後の作戦基地とすべきや否やに関し、大本営と現地軍との間に、前記のごとく、とかく意見の食い違いがあったが、一応本作戦の目的は達せられたものとし、第十一軍は十二月十一日夜以降、常德付近から反転を開始した。

第一大隊は揚板橋付近において態勢を整え反転作戦の準備をした。まず患者を遠く後方に下げ、編成の建て直しや弾薬の補給などが行われた。

反転する我が部隊に対し、敵は三方から追尾し、我が部隊が高地から中腹まで後退する間に、もう敵が頂上に

現われ、猛射を浴びせる状況であった。主力が遠ざかるまで敵の攻撃を阻止しながら待つ気持は実に苦しいものである。

作戦各兵団は、軍命令に基づき松滋河右岸地区に反転し、揚子江を渡河し、一月初頭、それぞれ原駐地に帰還して本作戦を終了した。

軍旗を捧持し重圍脱出

三重県 松本荘衛

私は大正十一年二月十九日生まれで、徴兵検査を受けた昭和十七年の十二月十日、中部第三十八部隊へ入ったので、同年次の殆どが、翌十八年一月十日入営ですから一番初めに軍隊へ入ったわけです。

入営して十日程、十二月二十一日には約千人の戦友と一緒に、阿漕駅から下関↓釜山↓奉天↓山海関經由で、南京中央兵站に入ったのです。十八年の正月は南京で迎えたが、揚子江を溯航し安徽省銅陵の連隊本部で教育を

受けました。

私は第三機関銃中隊でしたが幹部候補を五人受けて、甲種幹部候補生は私一人だったと記憶しています。連隊では百人余志願して予備士官学校へ入ったのは二十余人ぐらいではないですか。

私の同年兵や、乙種幹部候補生で戦死しているひとが多いのですが、私が保定予備士官学校在学中に中支では、常德作戦があり、第一百十六師団（嵐部隊）も第十三軍隷下で参戦し、また、沔桂作戦第一期の衡陽攻略戦ではその主力として四十五日間戦い、私の歩兵百三十三連隊も黒瀬連隊長は玉碎を覚悟した程でした。今もよく言われるのですが「松本君が予備士官学校へ行かなかつたら、とっくに死んでいたよ」と、それ程犠牲者が出たわけで、或る意味では命拾いをしたわけでした。

昭和二十年二月、興福橋討伐中、雪の中で「第三機関銃中隊の松本少尉は本日中に連隊本部へ出頭し、松井副官の指示を受くべし」という連隊命令が来たのです。始めは何だか判らなかつたが、山中少尉の交替として旗手候補になったということでした。